

幼児の造形表現における素材・材料の研究

——描画材作りによる子どもの表現意欲の高まりについて——

堀内 秀雄・杉本 亜鈴

はじめに（問題意識）

幼稚園・保育園における幼児の造形活動は子どもたちの日常と密接に関わっている。子どもたちが表現したいと思う対象（モチーフ）や、造形作品に表現される子どもの感情・情景も、必然的に幼児の日常における体験から発生してくるものである。造形作品を造るという行為は、表現の意思の具現化であり、本来は制作（製作）者の年齢を問わず表現の欲求に基づく活動である。

しかし、現実問題として、造形教育の現場における限られた時間と環境の制約の上に成り立つ「もの作り」は、必ずしも子どもの表現の欲求に基づくものではあり得ない。幼児期から「造らされ」「評価される」造形表現のあり方に、苦痛を感じている子どもは決して少なくない。幼児期の苦痛をともなった造形体験は、造形表現そのものに対しての苦手意識となって子どもたちの成長後に大きな影響を及ぼすこととなる。

このような問題を解決するために、教育の現場で造形活動に従事する指導者たちは、子どもの発達段階や、教育的に望ましい効果を得られる課題を設定し、制作（製作）のための素材や材料を選択して来た。

本来の造形表現のあり方からすれば、まず制作（製作）者の表現の欲求があり、その欲求を具現化する手段として素材・材料の設定があるべきである。即ち制作（製作）者が素材・材料を自ら設定する時点において、既に造形表現が始まっていると言えるのである。

しかし幼児の造形教育の現場では、表現の欲求が育ちきっていない、または表現の欲求と造形表現の手段が結びつかない等の様々な要因から表現の欲求が抑えられてしまう場合が多くある。今回、制作者の観点からこのようなケースの問題解決の手段を考える上で自作の表現ツールに着目し、自作の表現材料に対する使用欲求から幼児の造形表現の発達を促すことが可能なのではないかと考察した。

本研究は造形素材・材料の特質に注目し、造形活動に意欲を持っていない子どもたちの表現の欲求にアプローチするための手段としてこれらを効果的に活用することが出来るのではないかとという仮説に基づいて構築されている。

I 幼児教育の現場が抱える造形に関する諸問題

1 日常の問題に注目する

幼児の造形活動が家庭や幼稚園・保育園での日常生活に大きく関わっている以上、子どもの表現の欲求に関する研究を行う上で、幼児教育の現場が抱える諸問題を見過ごしにはできない。そこで、今回の研究では事前に東京成徳短期大学附属第二幼稚園において、日常園児たちと接している教員

を対象に、造形に関する諸問題についてアンケート調査を実施した。

調査内容（アンケート項目）は、下記（１）～（４）の代表的な造形分野において、日常の幼稚園での子どもの造形活動や造形教育に関して困っていること、気になっていることを具体的（何才児か・どのような活動の時か等）に記述するものとした。

- （１）粘土での造形に関する問題について
- （２）描画に関する問題について
- （３）工作に関する問題について
- （４）（その他）造形一般に関する問題について

このアンケート調査の結果、解答に特筆すべき偏りが見られたのは「②描画に関する問題について」であった。描画に関する問題として挙げられた解答の７割が絵を「描かない」または「描き出せない」子どもに関する問題であった。また、これらを含む８割の問題の発生が造形活動の導入部分に集中していることも明らかになった。

２ 描画の問題

では、なぜ他の造形活動と比較して描画は取りかかりにくいのか。また表現意欲を引き出しにくい課題となるのかを考えてみたい。

まず、第一に粘土やその他の工作材料と比較して、クレヨンや水彩絵の具といった描画材料は比較的簡単に入手が可能であるため自宅や園での使用頻度も高い。このため、子どもたちにとって表現材料としての目新しさといった魅力に欠けることが考えられる。

また、描画作品は二次元上に図式化された表現であるため、その性質から、他の造形作品と比較して、簡単に「ウマイ」「ヘタ」といった第三者の評価が下され易い点が問題点として挙げられる。第三者の評価は、それが的確なものであるか否かを別の問題として、幼児期の子どもたちにとっても、大きな影響を及ぼすものである。

次に、幼児が絵を「描かない」「描けない」状況に置かれる理由を推察し、大きく分類してみる。

- （１）描画という行為または状況・対象に関して心理的な要因がある場合
- （２）「描かない」こと自体が、何らかの子どもの意思表示である可能性
- （３）子どもの発達段階の個人差
- （４）描画に対して興味・関心が持てない場合
- （５）比較・評価に対する苦痛
- （６）子ども自身の目標と力量のギャップ

絵を「描かない」「描けない」子どもの問題は心理学をはじめ、各方面から研究がなされている。実際問題として、子どもが「描かない」「描けない」原因には少なからず心理的な要因が含まれると考えられる。しかし、その問題の解決に関しては心理学的観点のみならず制作者の観点によるアプローチが有効であると言える。

Ⅱ 造形素材・材料を用いた表現意欲の引き出しについて

１ 表現意欲と素材・材料の関係性

表現意欲と造形素材・材料の関係については、先に述べた通りまず表現の欲求があり、その上で表現の具現化のための素材・材料や道具を選択するのが本来の造形活動の姿である。ただし、表現と制作（製作）の関係においてこの図式が成立するためには、作り手が素材・材料の特質、使用方法に対して一定の経験と知識を持っている必要がある。つまり初めて扱う画材での描画表現に関してこの関係性はほぼ成立しないものであると言える。

初めて手にする素材や材料を使って制作（製作）する場合には、作り手が熟練の制作者であっても、幼児の場合であっても、目新しい材料に対する興味・関心が表現意欲を高め、素材・材料自体が制作（製作）の原動力となり得る事実がある。

しかし、幼児の造形教育においては、造形素材・材料に対する興味や関心が初回のみで失われてしまってはならない。新たな体験から継続した造形活動へとつなげることができない場合、その先の「表現のための能動的な素材・材料の選択」という段階への発展が望めないからである。

ここで問題となるのが「技法」の取り扱いである。素材・材料の特性を利用した平面造形の表現技法としてモダンテクニック¹⁾を挙げることができる。モダンテクニックと総称されるこれらの技法は、素材や材料の持つ力を利用して短時間で制作（製作）者の表現の領域を拡大し、描画に対する苦手意識の克服をはかることができるため、その確立以来多様な造形（美術）教育の現場で利用されて来た。これらの技法は素材・材料の特性を大きく利用して行う造形表現であり、意識的にこれらの技法を利用して作られた作品は、素材・材料の必然性を表現の必然性に転化したものであると言える。

造形素材・材料の体験を制作者の表現の意思に基づく能動的な造形活動へとつなげるためには表現と素材・材料の関係性に留意して継続的な制作（製作）を行うことが必要となる。そのために既に確立された技法を活用することも有効であるが、表現意欲と素材・材料の関係性を理解した上であれば既製の枠組みに捕われずに、造形素材・材料からのアプローチによって子どもの表現意欲を引き出すことができる。

2 導入の問題

先に取り上げた附属幼稚園における造形に関する諸問題のアンケート調査の解答においても、指導法・環境構成を含んだ造形活動の導入部分に関する記述が目立った。

造形活動において子どもの表現意欲を引き出せるか否かは、多くの場合その活動の導入部分にかかっている。従って描画の問題解消のためには、活動の導入部分が重要なポイントとなり、また、この導入部分の骨子となる題材設定や環境構成が大きな役割を果たすと言える。

III 実践事例研究の記録

1 実践事例研究の計画とそのねらい

(1) 題材設定の理由

- ①平成16年7月に東京成徳短期大学附属第二幼稚園において、日常園児たちに接している教員を対象に実施した「幼児の造形活動に関する諸問題について」のアンケート調査から、特に解答に偏りのあった「描画に関する問題」のうち「絵を描かない子ども・絵を描けない子ども」に対する問題解決のための研究として立ち上げた「幼児の造形表現における素材・材料の研究」に基づき、本題材を取り上げる。
- ②描画による表現の欲求が生まれる時、つまり子どもが心から絵を描きたいと感じる時とはどのような状況かを考察し、指導計画の導入部において教員による「課題設定・環境づくり・援助」によって、絵を描きたくなる状況を作り出すことで造形意欲の引き出しを図ることが出来るのではないかという仮説に基づいて今回の題材を設定する。

(2) 実践事例研究案の概要

- ①活動の導入部分において、幼児自身が実際の活動に際して絵の具作りと表現の関係性を認識できるように動機づけを行う。パペットと紙芝居形式のクイズを利用して、材料と表現、自然と

素材についての問いかけを行う。この時点でものの成り立ちを通して絵の具の由来、構成物質に対する疑問の投げかけを行うとともに、子どもたちが何を描くかで行き詰まらないように「土から出来ているものは何だろう?」「茶色いものは何だろう?」といった描画モチーフに対する提案の下地をつくっておく。

- ②指導教員が幼児たちの前で絵の具作りから描画までを実演し、事実上の作業手順の説明とする。この時、初めての活動でも戸惑いが少なくなるように子どもたちが日常接している教員に実演してもらうことが有効であると予想される。また、土から絵の具への材料作りの過程におけるエンターテインメント性を活用する。実演後すぐに「園庭の土を使用して茶色の絵の具を作ってみようか?」と園児たちに呼び掛ける。絵の具に適した土は、園庭のどのような場所にあるのかを事前に調査し、その環境・条件を提示して該当する場所へ園児たち自身に誘導させるようにする。
- ④園庭の土を採取し、水と攪拌する。これをしばらく置いて土の大きな粒子を沈澱させ、上澄みを別の容器に移し替える手順を数回繰り返して顔料に代わるものとする。採取した園庭の土から取り出した上澄み液に、メディウムの代わりとなる事務用の水糊を加え、かき混ぜることで自作絵の具の完成となる。
- ⑤自作絵の具を使って制作（製作）を行う。テーマ・枚数は基本的に自由として制限を設けない。ただし、茶色一色による描画であるため、描画の支援としてのモチーフの提示は行うものとする。また、自作の絵の具を使用しての描画である点を明確に認識できるようにするため、既製（市販品）の絵の具も同時に使用することができるよう設置する。また、実践事例研究の実施によって、子どもたちの表現意欲の減退といった影響が出ないように配慮するため、「描けない」ケースが出た場合に備え、自作絵の具を使ったバッチクの準備をしておく。
- ⑥時間が許す限り鑑賞の活動を行う。また、作品及び自作絵の具の持ち帰りの準備を進める。幼児の作品については写真撮影のため、当日は可能な限り預かるようにする。

（3）実践事例研究における活動目標

- ①子どもが心から「描きたい」と感じる環境（状況）の設定。
- ②表現の欲求に基づいた幼児の描画表現の実現。
- ③子ども自身が「また描きたい」と感じられる充実感・達成感の獲得。

（4）実践事例研究の活動にあたっての確認事項

- ①造形素材・材料の観点から、表現の欲求に対してアプローチを行う。
- ②「描画嫌い」や「描かない」「描けない」子どもたちにとって、造形素材・材料は問題解決のためのツールとなり得ることを造形活動の実践を通して明らかにする。
- ③本実践事例研究計画は日常園児たちと接している教員の声をもとに立ち上げ、日常の幼児教育及び保育における造形（描画）の問題解決を目的とした研究に基づくものであるため、現場の教員との連携を重視して活動を進める。
- ④今回の実践事例研究計画を「幼児の造形表現における素材・材料の研究」の第一段階と位置付け、造形材料と表現の欲求の関係性を解明する継続的な研究を行う。
- ⑤今回の実践事例研究のデータ（テキスト・画像）を記録し、子どもの様子と現職教員の感想をもとに分析・考察するとともに今後の研究計画を決定する。
- ⑥本実践事例研究は子どもが表現の喜びを獲得する事を目標とするため、活動の進行とデータの収集にあたってはこの点に最大限留意するものとする。

2 実践事例研究の検証方法

本実践事例研究では、描画材を自作することによって子どもの表現意欲に高まりが見られるかを調査しその効果を検証する。調査・検証の対象が表現意欲という目に見えないものであるため、客観的なデータの考察に配慮し、下記のように複数の観点から表現意欲の高まりを調査する。

また、具体的調査・検証の資料として、ビデオ・写真・子どもの作品・参加教員を対象としたアンケートの解答を取り上げる。なお、下記(2)のアンケート項目については、参加教員に対して事前に簡単な説明を行ったうえで実践活動に臨んだ。

(1) 調査・検証の観点

- ①子どもの絵に見られる表現意欲の読み取り
- ②描画時間、集中の度合いによる表現意欲の読み取り
- ③作品枚数による表現意欲の読み取り
- ④描画材料に対する愛着度合いによる表現意欲の読み取り
- ⑤子どもの行動表情による表現意欲の読み取り
- ⑥既製の絵の具と自作の絵の具の使用頻度による表現意欲の読み取り

(2) 日常園児たちと接している教員に対する実践事例研究についての事後アンケート調査項目

- ①実践事例研究の活動を通して、自分自身の手によって絵の具を作ることで、子どもの描画に対する表現意欲の高まりはあったと感じますか？
- ②子どもの描画時間の長さ、集中の度合いに変化はありましたか・またそう感じた具体的な場面(理由)をお答え下さい。
- ③絵の具作りを行っている最中、子どもの様子は普段と比べて何か変わったところはありましたか？
- ④今回制作(製作)した作品に対する子ども自身の愛着度合いは感じられましたか？
- ⑤既製の、いつも使っている絵の具で絵を描いている時と比較して、今回自作の絵の具を使って絵を描くことに関して、子どもの様子に普段と違う点があったと感じられましたか？
- ⑥その他、お気づきの点や今後の御要望などをお書き下さい。

3 実践事例研究の記録

題材名：「画材作りによる子どもの表現意欲の高まりについて」

実施日：平成16年11月18日(木)

対象：3～5才児(預かり保育参加園児)

参加数：14名

時間数：2：30～3：30(60分)

場所：東京成徳短期大学附属第二幼稚園 教室(ひよこ組)及び園庭(雨天決行)

使用材料：園庭の土・スコップ・容器・水・雑巾・パレット・筆洗器・画用紙・筆・モチーフ・メディウム(水のり)・参考作品・既製の水彩絵の具(市販品・茶系2種類)・白クレヨン

使用設備：教室・水道・机・椅子・乾燥棚

データ収集機材：ビデオカメラ(2台)・カメラ(3台)・アンケート用紙(教員対象・事前配付)

IV 絵の具作りによる表現意欲へのアプローチ

1 子どもの絵に見られる表現意欲の読み取り

子どもの作品に見られる筆致の勢いから表現意欲の読み取りを試みる。

今回使用した自作の土絵の具が初めて扱う描画材料であるため、第一筆目の描き出しに多少の緊張感は見られるものの、勢いのある筆致が見られる。(写真1)

具体的に自作絵の具の使用面積と余白の面積比を見ると、余白を残していると思われる作品は全体の6%、画面全体を使って描いていると思われる作品は79%、更にこの中で画面からはみ出して描いている作品は27%見られた。

また、今回は絵の具のメディウムとして、事務用の水のりを使用した。これは活動の対象が預かり保育の参加園児であったため、年少園児の安全に配慮して採用したものであるが、絵の具の構成としては透明水彩に近いものとなり、結果的に重ね塗りの筆致を判別しやすい仕上がりととなった。子どもの作品に重ね塗りが見られるということは、一枚の作品に対する執着の表れであり、重ね塗りの痕跡は表現意欲の高まりを示唆していると言える。(写真2)

2 描画時間、集中の度合いによる表現意欲の読み取り

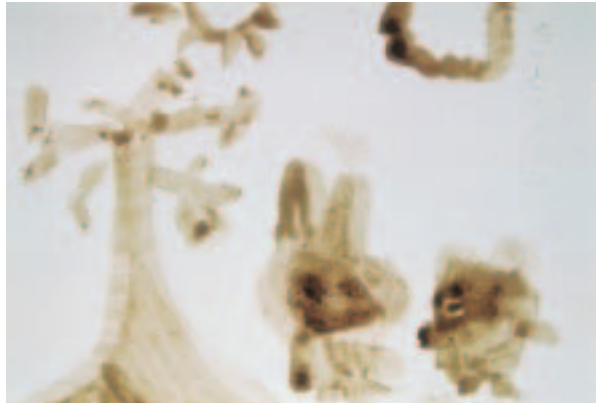
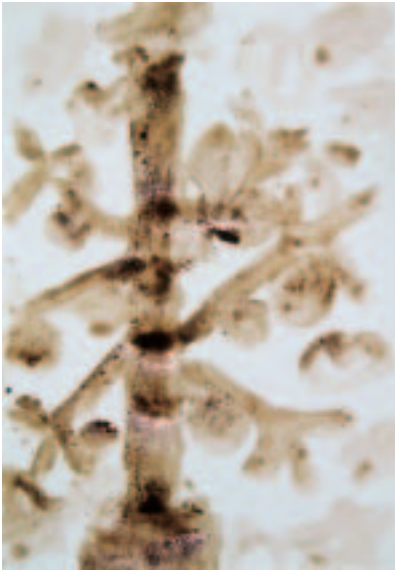
次に、自作絵の具の完成から描画に取りかかるまでにかかった時間の長さから表現意欲の読み取りを行ってみる。自由テーマにした場合、一般的には何を描こうかと考え込み、また周りの園児たちの様子を見ながらおもむろに描き始めるケースが多いが、ここではかなり即座的に描画に至っている。このことはとにかく絵の具を使ってみたいという気持ちだが、描くテーマよりも先行し、描きながら次の表現を探っているように推察できる。また、絵の具作りを行いながら何を描くかを考えることが出来た。つまり結果的に描画のなかで自作絵の具に導かれ、表現行動に結びついていったと考えられる。

ビデオに記録された映像から確認できる、自作絵の具の完成から描画に取りかかるまでにかかった時間の長さを分析してみると、いちばん最初に描き始めたA児で画用紙と筆を手にしてから描き出すまでの時間は、約30秒、次に描き始めたB児で約4秒、更にC児で約3秒、D児でも約3秒となっている。いちばん最後に描き出したE児は、周囲の様子を見ながら「何をかこうかな?」と言っている様子が映像に記録されているが、紙と筆を手にしてから約1分40秒後には描き始めている。このタイムから考えると、今回の実践実例研究に参加した幼児たち全員が比較的早い描画への取りかかりをみせたと言える。

日常園児たちと接している教員を対象とした実践事例研究を通してのアンケート調査においては、描画に対する集中度合いに関しては日常と大差ないという解答が多く、今回特に注目すべき結果を得られなかった。アンケートの記述内容によるとこれは色彩ヴァリエーションの不足によるものではないかという意見があった。色数の少なさが表現の発想に歯止めをかけたという可能性は事実としてあるが、現実的に絵の具そのものの「塗り」の感触を味わうことに執着した幼児や、自作絵の具と市販絵の具の微妙な色相差を認知して併用するに至った幼児など、材料の特性を捉えることが出来た園児については描画に対する集中・執着も見られた。

3 作品枚数による表現意欲の読み取り

全体で1時間の活動の中で、描画に割ける時間が平均で30分と仮定して、今回の活動に参加した園児14名で合計33枚の作品が提出されている。教員アンケートにも普段よりも多くの枚数の作品を描いているとの解答があった。今回の活動では白画用紙100枚を用意し、何枚でも自由に使ってい



←写真1：勢いのある筆致の見られた子どもの作品

↑写真2：重ね塗りの痕跡が見られる子どもの作品

いと園児たちに伝えた。普段の描画活動では通常一枚の画用紙で制作（製作）を行っているということで、この点が子どもの表現意欲の拡大に作用した可能性もある。

しかし、前述の通り、預かり保育における実践のため、活動途中で帰宅した園児が数名いたことを考えれば、制作（製作）枚数はかなり多いと言える。描画時間、集中度合いと合わせてこの結果を考えると、子どもたちは連続して一気に複数枚の作品を仕上げていることが分かる。

4 描画材料に対する愛着度合いによる表現意欲の読み取り

子どもの自作の描画材への愛着は、材料作りの目新しさを超えて、表現の欲求の継続につながると言える。今回、希望した幼児は自作絵の具の保存・持ち帰りができるように、小型のポリ容器を準備した。描画を終えるまで活動に参加した園児9名で合計13本分の絵の具を持ち帰っていることから、子どもたちが今回自作した描画材に愛着を持っていたことが窺える。

5 子どもの行動表情による表現意欲の読み取り

実践事例研究終了後に教員から、導入部で子どもたちがだんだん前のめりになっていく様子が印象的だったという意見があった。ビデオに記録された映像を見ると、最初、机を挟んで反対側の床に体育座りをしている子供達のだんだんと机の端に寄って、最終的には机の上に身を乗り出していく様が確認できる。

具体的なリアクションのきっかけとなった言葉（行動）は以下（1）～（3）の通りである。

- （1）茶色い絵の具って土から出来ているのを知っている？（4名が立ち上がって前に出る）
- （2）ウサギさんが食べるニンジンは何処で出来る？（更に4名が立ち上がって前に出る）
- （3）園の土で絵の具が作れるかな？ちょっとやってみよう。（全員立ち上がって前のめりになる）

6 既製絵の具と自作の絵の具の使用頻度による表現意欲の読み取り

今回の実践事例研究では、制作（製作）時に既製絵の具と自作絵の具を同時に使用できるように



写真3-1：既製の絵の具と自作の絵の具を使い
いわけた子どもの作品



写真3-2：既製の絵の具と自作の絵の具を使い
いわけた子どもの作品

することで、これらを比較して自作絵の具が「自分の手で作ったものである」という事実を子どもたちが明確に認識できるようにした。このような中で、数人の幼児が既製絵の具（2種類）と自作絵の具の微妙な色の違いを読み取り、使い分けることで作品上の色彩表現を拡大させる様子が見られた。（写真3-1・3-2）既製の絵の具と自作絵の具の併用は予想していたが、短時間の活動の中で色相の微妙な差異を利用した必然的な色彩表現にまで至ることは予想外であった。

このケースでは、子どもが自作絵の具と既製絵の具を使い分けたことから、以下の三つの事実が浮かび上がって来る。まず、第一に既製絵の具2色と自作絵の具の微妙な色相差を理解し、使い分けることが出来たこと。第二に自作絵の具と既製絵の具の違いを認識することが出来たことである。これは、自作絵の具と既製絵の具を混色せずに使い分けている点から、自分で作った描画材に対する認識と愛着を読み取ることができる。第三に自作絵の具を使用した描画を行った上で、既製絵の具の種類を1色から2色に増やすことを子どもから要求した点がある。これは作品を良くしようという表現欲求のために、子どもが材料に対して貪欲なまでの意欲を見せたことになる。

上記1～6により制作者の観点から、自分の手で作った表現材料を手にすることで表現意欲の拡大を図ることができると仮定して行った実践事例研究では、幼児の自作絵の具による描画活動において一定の意欲の高まりが確認された。

今日、描画材はそれぞれの目的や用途に沿って高度な発達を遂げている。これをうけて造形教育の現場でも、指導にあたる教員や造形活動に取り組む子どもたちに、新しい体験の積み重ねと専門的な知識の研鑽・継続が求められて来ている。しかし、このような現状においても「絵を描きたい」という人間本来の描画に対する表現欲求の前において、描画材は表現の欲求を満たすために自然の中から生み出された「実現の手段」であるということを忘れてはならない。描画材料の高度な発達が皮肉なことに子どもの日常生活と描画活動の間に高い敷居を作ってしまったことも事実であるが、絵画表現の最も本質的な側面を考えると、絵画の長い歴史から見ても、表現者は常に表現の欲求に基づいて自然の中にあるものから材料や道具を生み出し、造形表現のヴァリエーションを拡大して来たのである。この本質的な原理をもう一度見直し、豊かさの故に混沌として来ている現在の造形

教育の現場において、表現の欲求・意欲と材料の関係をもう一度考えてみる必要があるのではないか。

例えば子どもが園庭の砂の上や結露したガラス窓に指で絵を描く、乾いた道路の上に水をまいて絵を描くと言う行為は、表現の欲求から生まれた描画の手段であり、また同時に描画材料を用いなくても描くことができるという事実に触発された表現意欲の拡大である。このように特別な描画材を用いることはなくても、表現は材料を生み出し、材料が表現を触発する事態は日常の中に存在している。今回の実践事例研究で、造形素材・材料による表現意欲の拡大が可能であることが明らかになった。これは今後、様々な造形教育の場面での応用の可能性を秘めていると言える。

おわりに

今回の研究は、東京成徳短期大学附属第二幼稚園における造形活動の問題解決のために立ち上げ、実践事例研究を実施させて頂いたことからこのような結果が得られた。新しい試みで臨んだ活動に対して幼児教育の現場の理解が得られたことは何ごとにも代え難い成果となった。

一方で実践事例研究では課題の取り回しなど反省点も多く残った。これらについては現場の先生がたの経験と知恵をお借りして今後改善を行うとともに研究継続によって課題の深度と範囲を拡大して行きたいと考える。

註

- 1) 「モダンテクニック」とは、ここでは美術教育の現場で使われる、素材や材料の特性を利用した造形技法（スクラッチ・デカルコマニー・マーブリング・フロクタージュ・にじみ等）の技法の総称を指す。